

出雲流庭園の普及と現状

木佐幸佳

1. はじめに

出雲地方には「出雲流庭園」と呼ばれる独特な庭の造りかたが残っており、全国的にも珍しい。われわれの分科会でも 10 年ほど前から実際の状況を調査してきたが、確かに同じ形の庭づくりであることがわかった。

一方では、今後これらの庭の存続が危ぶまれるのではないかという声も聞いているため、出雲市斐川町の民家の庭づくりの普及を文献から見るとともに、現状がどうなっているのか一部を調査したので紹介する。

2. 庭に関する文献例

出雲地方の庭に関する記録はあまり残っておらず、庭づくりの様子を確認することが難しい。そのような中で数少ない文献から、庭の普及状況を追ってみた。

1) 龍居松之助の寄稿文『松江地方の庭園瞥見記』

龍居は大正から昭和初期にかけて活躍した庭園学界の権威者であるが、昭和 4 年に松江地方を訪れ、この地方の庭園を視察した感想を地元新聞に寄稿したと思われる文章が残っている。(当時の肩書は大日本庭園協会理事)

訪れた先として、松江市の菅田庵・高橋隆一郎・岡崎邸、出雲市の康国寺・勝部本右衛門邸の名前がある。

この地方の庭園の特徴として、次の点をあげている。

①不昧公の影響による茶庭と観賞庭を兼ねた庭となっている。

②地形を利用して眺望がよく、クロマツの高生垣（築地松）がある。

③庭木の主要なものは人工を加えて玉作りと
しているが、厭味がない。

④灯籠は今一つだが、手水鉢の使い方は巧だ。

⑤飛石は立派で他地方ではあまり見られない。

そして、末尾には次のように記している。

「松江地方の庭園には多くの優れた特色を有している。その特色を味わわずして、この地方の人が目新しい他国の庭園をまねることは愚の骨頂である。私の意見として庭園に自然と備わる地方色は大いに尊重すべきものであるが故に、造園家も鑑賞家も大いに自重してその地方の特色をより立派に仕立ててゆく責任があろうと思うのである」



写真－1 龍居松之助の寄稿文

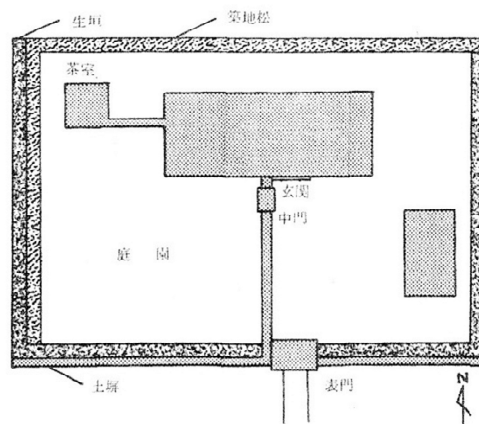
これを読むと、この地方に当時から地方色豊かな庭づくりが寺や資産家の家では既に存在していたと思われる。

2) 「出雲流庭園—その造形と美学—」(小口基実、戸田芳樹：S50 発行)

龍居松之助の寄稿文から約 40 年後、この本が発行されている。20 代の若い造園家の小口・戸田が、戦後高度成長期の終わりごろの S46 に旧家と呼ばれる民家など 47 庭園を調査して、出雲地方の風土や歴史、人間心理面から庭園を詳細に考察している。

その具体的な特徴を、次のように記載している。

- ①建物は南向きで、庭は南西部に作る。北西部に築地松を作る。
- ②建物の床面が高く、屋敷周りに白砂を敷く。
- ③飛石を中心とした庭で歩きやすく、平面構成が優れている。
- ④庭木のマツの手入れが細やかであり、古銅形灯籠が顕著に見られる。
- ⑤茶庭的要素の発達から中門額縁技法が見られる。



図－1 屋敷と庭の関係

著者は江戸期作庭書に拠らないこの地方独自の庭園づくりに着目しており、この本で初めて「出雲流庭園」の言葉が使われている。

3) 「ふるさと久木」(久木コミュニティセンター：H30 発行)

この本では久木地区(出雲市斐川町今在家・原鹿・福富・美南)の明治以降の暮らしの様子が述べられており、その中で「住環境」について、次のように書かれている。

「明治・大正時代に建てた一部の家を除いては、明治から昭和 40 年頃までの約百年の間、社会情勢なども厳しく、経済のゆとりのなさも災いして、ほとんど改築などできなかったと聞いている。(中略)

昭和 34 年から岩戸景気と言われる好景気になり、地方でも実感できるようになったのは 40 年頃であろう。・・・

一部分改造するより全体を立て替えたほうが、ということになって 45 年頃には母屋の建築ブームとなり、あちこちで建築の槌音が響き渡るようになった」

また、大きな水害が斐川町内では S39、S47 と発生して住民の生活に大きな影響が出たことも記載されている。

ここには庭に関する記述は見られない



写真－2 S47 豪雨災害の状況
(出雲市斐川町莊原付近)

が、S40年代に暮らしの余裕が出てきた様子が書かれている。そのため、母屋の改築に合わせて何らかの庭づくりが行われたのではないかと推測された。

そこで斐川町に住む知人にこの当時の様子を聞いてみると、「会社勤めをする人が多くなって暮らしに余裕が出てきた」「このころ母屋を全面的に直した」「直した家は水害も影響しているのではないか」という話があった。

また、庭づくりについても、「家の改築に合わせて庭を現在の形にした」「もともと小さな庭はあったが、その後広げていった」との話があった。

4) 直良市長の寄稿文『出雲流庭園の再認識』

S62に書かれた当時の直良出雲市長の寄稿文があり、そこにはこう記されている。

「出雲の農家には築地松に囲まれた屋敷に、すべてそれ相当の庭が造られ、商家にはすべて坪庭がある。そこに見られるものは全部といってよい程同じ形のものである。・・・

名園はないかもしれないが、ほとんどの市民が庭を持ち生活に密着している地方は極めて少ないのではなかろうか。・・・

地方文化が中央文化に押し流される、東京文化が都会で流行すればいずれ地方に流行する、文化の単一化である。庭園というのはその土地風土に適した個性あるものであってほしい。それが私の願いである」

新しい築庭に出雲流庭園の姿がなくなりつつあるのを憂いて、「地方文化を大切にしたい、個性ある庭園を復元したい」という思いのもとに、斐川平野にあった豪農屋敷と庭園を移築して『出雲文化伝承館』がH3に作られた。



写真－3 出雲文化伝承館

(リーフレット『「出雲流庭園」のご紹介』：出雲文化伝承館より)

5) 「灘分郷土誌」(H3 発行)

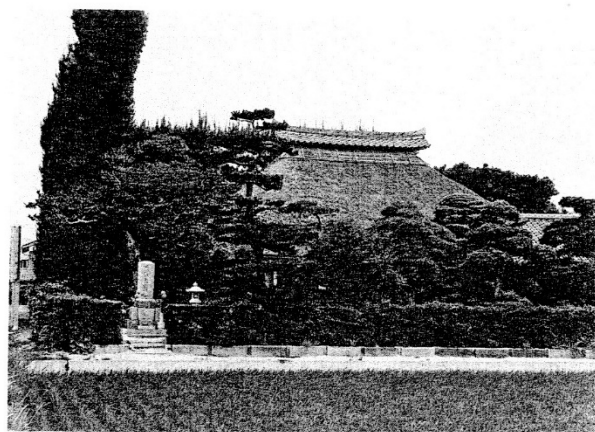
この本は斐伊川河口部の出雲市平田町灘分地区について書かれているが、『第13章 風俗・生活習慣』の中に、この地区の庭に関する記述がある。

「主として農家の住居構造のうち、庭園の造成は斐川平野の特徴の一つである。その面積は200坪(約600㎡)程度あり、基本構造として、芯松を中心とし、モチ・モッコ

ク・椎・サツキなどの常緑樹、来待石の春日灯籠・雪見灯籠、立石を配した築庭は見事の一言であろう」

このことから、平成の初めには一般の農家にも出雲流庭園の特徴を持つ庭が広まっていた様子がうかがえる。

このように見ていくと、出雲平野の民家の庭は S40 年代に現在の形が出来ており、既に約 50 年が経過していることが考えられる。



写真－4 当時の民家

3. 現在の庭の調査

「現在、このような民家の庭はどんな状況になっているのか？」と思い、現地を歩いて調査することにした。しかし、直に庭へ入ってみることが出来ないため、道路から民家の庭を眺めて、外観から見た印象で現在の状況を調べてみた。また、立ち止まって詳しく観察することは憚られるため、大まかな調査となった。

1) 調査対象

対象地区は、出雲平野の出雲市斐川町内（原鹿、坂田、三分市、美南の一部）とし、古くからある一戸建ての民家（総数 175 戸）を対象とした。

2) 調査項目

- ・庭の管理状況はどうか。
- ・出雲流庭園の特徴が残っているか。
- ・地域資源としての可能性があるか。

に着目して、調査項目は①管理状況、②出雲流庭園の特徴である立石の有無とした。



図－2 調査対象地区

3) 調査結果（表－1）

①庭の管理状況（図－3）

調査箇所を次の 5 段階に分けてみた。この評価は外観から見た私の個人的な感想であり、明確な基準を決めてはいない。

- 「A:特に良い」・・・手入れが良く見栄えが良い
- 「B:良い」・・・手入れは良いが規模が幾分小さい
- 「C:普通」・・・規模が小さい、または手入れが今一つ
- 「D:良くない」・・・手入れが不十分で荒れている
- 「E:特徴なし」・・・出雲流の特徴が認められない

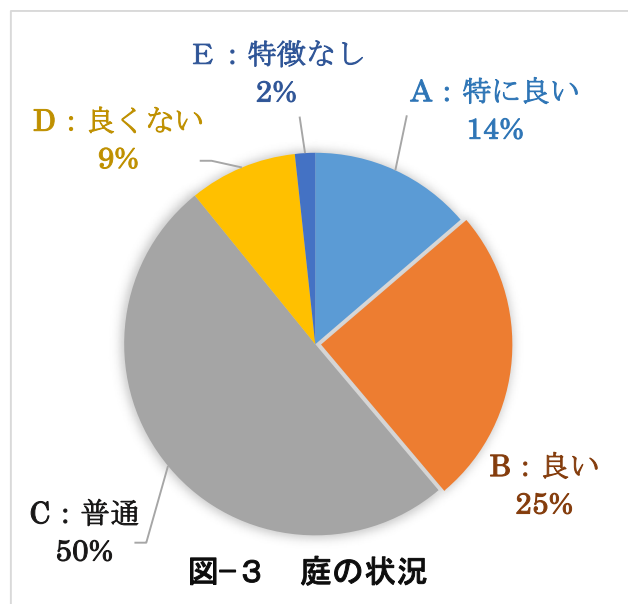
表－１ 調査結果

	全体		立石あり		立石なし		立石不明	
A:特に良い	24	14%	20	84%	2	8%	2	8%
B:良い	44	25%	35	80%	4	9%	5	11%
C:普通	88	50%	23	26%	28	32%	37	42%
D:良くない	16	9%	3	19%	4	25%	9	56%
E:特徴なし	3	2%			1		2	
計	175	100%	81	46%	39	22%	55	32%

「A」「B」合わせて約４割の民家できれいに管理されていた。また、「C」の中にも規模は小さいが管理されている家もあり、庭が生活に密着しているのを感じた。

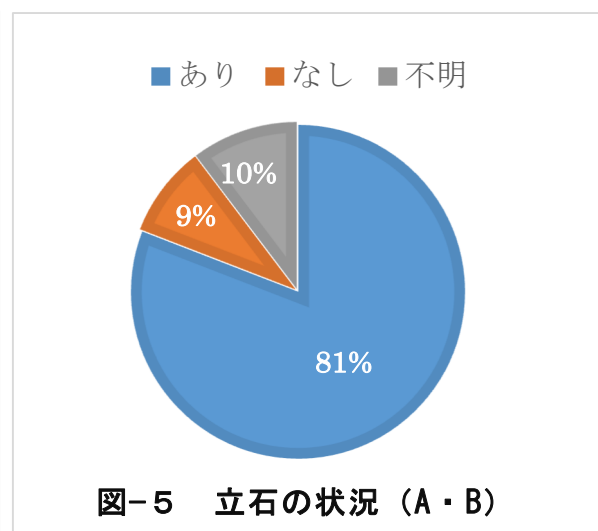
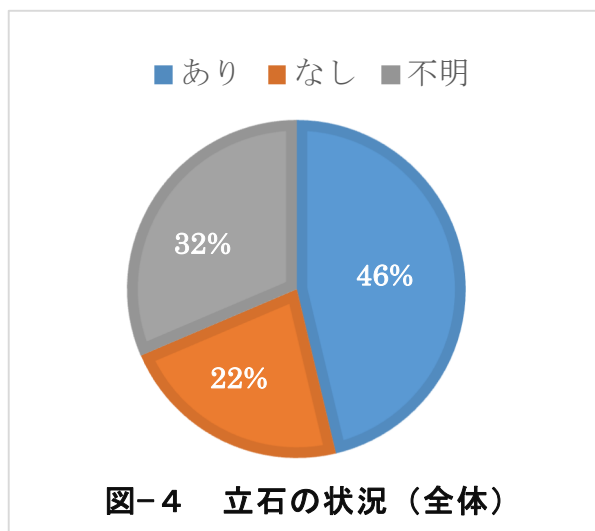
ほとんどの家では玄関前に生垣があり、横一線にきれいに剪定がなされて端部に反りが見られる家もあった。樹種はヒイラギモクセイが多くカイヅカイブキも見られた。家の正面が板塀やコンクリート塀となっている家はわずかしかなかった。

しかし、管理に手が回らず、生垣や庭木が伸びている民家も時折見かけた。また、まれに庭木が大きくなり、思い切って切られて大きな幹が目立つ庭も見られた。



②立石の状況（図－４・５）

全体で約５割近くの家に立石が確認でき、「A」「B」では８割を超える家にあった。立





写真－５ 立石のある庭①



写真－６ “ ②

石はどの家も庭の南西部に置かれており、中には2 mを超える大きなものもあった。

4. 考察

調査結果から次のようなことが考えられる。

①管理の状況が良い庭が多い。

予想以上に良く手入れがされており、調査の途中でも脚立の上で庭木の剪定作業に励む幾人かの住民に出会った。この人たちによってきれいな庭が保たれていることを実感出来た。

知人から「隣近所に対する見栄もあるし、放っておくのはみっともない」「『きれいにされていますね』など庭の話題があいさつ言葉になっている」という話を聞いて、日ごろからこの地区には景観に対する意識の高さが根付いていると思われた。

一方では、大きくなった庭木の処理に困っている家も見かけられたが、造園業者など専門家の適切なアドバイスがあれば、もっとうまく管理が出来るのではないかと感じた。

②「出雲流庭園」の特徴が残っている庭が非常に多い。



写真－７ 出雲平野の民家①

(生垣の美しさが目を引く)



写真－８ “ ②

(屋敷と庭が調和している)



写真－9 “ ③

(大きな石垣が重厚さを感じさせる)



写真－10 “ ④

(庭木がきれいに管理されている)

ほとんどの家には「出雲流庭園」の特徴が見られる庭が現在でも残っていることがわかった。家は南向きで玄関は向かって右にあり、南西部に庭があった。「E」以外は庭の造りが同じで、生垣の向こうの屋敷側にはマツや玉物仕立てのイヌマキ、ツツジ類が垣間見えた。また、庭の南西部に立石がある民家を半数近く確認し、管理の良い「A」「B」の民家には実に8割以上に立石があった。

時代の流れで玄関先の東側半分は駐車場や作業小屋になっている民家はあったが、家の南西側には庭があり、S40年代ごろと比べて庭はそれほど大きな変化があるようには思われなかった。

知人によると、「近所の家を見ても庭を大きく壊しているところはあまりない。日ごろ見ている風景はなくしたくないと思って庭を残しているのではないか」という話だった。

③地域資源の可能性

今回の調査で「A」が24箇所(全体の14%)あり、今後もっと調べると数多くの良い庭があると確信できた。そのような庭は外観から見るだけでも十分楽しめるため、庭の



写真－11 “ ⑤

(玄関前に門掛けの松が見える)



写真－12 “ ⑥

(広々とした空間にあり景観が良い)



写真-13 “ ⑦
(生垣の端部に反りが見える)



写真-14 “ ⑧
(石積みと生垣が整然としている)

中まで入ることが出来る民家を交えて、いくつかの家を見ながら歩く「出雲流庭園」を紹介できる「まち歩きツアー」をすることは十分可能と思われる。

また、「管理が上手な住民もいて、そういう人は庭づくりの話を聞いてもらいたいと思っている」という話もあり、地元住民との交流の可能性も感じられた。

④庭づくりの保存方法

出雲地方に残っている独特の庭づくりを次の世代に伝えていくためには、保存の方法を考える必要がある。際立った名園ではないが、生活の中に溶け込んでいる多くの庭々は景観的な価値が高いのではないかと考える。しかも、今の形になってから約 50 年が経過しようとしているため、文化財的な価値も出てきているのではないかと考える。

そのため、いろいろな人の知恵を活かして地域の人たちが誇りに思えるような形にならないだろうか。

5. おわりに

作家司馬遼太郎が「文化とは慣習のことである。いわば根雪のようなもので、保存の気分のないところには残らない」という言葉を残している。

今回、わずか一部ではあるが民家の庭を垣間見たが、「出雲流庭園」の特徴の見える庭が数多く残されており、しかもきれいに管理されていることが分かった。このことは出雲地方の貴重な文化であり、地元のわれわれがこのことをもっと広く情報発信しなくてはならないと考えている。

○参考文献

- 1) 「庄原歴史物語」：庄原歴史物語編集委員会
- 2) 「地方債月報 (S62. 11)」：(財) 地方債協会
- 3) 「わたしたちの出雲市」：出雲市教育委員会
- 4) 「街道をゆく 一本郷深川散歩」 司馬遼太郎